〔原 著〕

女子大学生の援助行動

—特に献血場面における—

波多野 梗 子*

奥 山 幸 子*

Blood Donation as Helping Behavior among Female College Students

Kyoko HATANO* and Sachiko OKUYAMA*

Recently not only health behavior toward oneself but helping behavior toward others have been regarded as socially significant. In the present study, we investigated blood donation as a typical of the helping behavior. Specifically, we examined 1) relation between blood donation (and intention to give blood) and general tendency to help others, and 2) possible other determinants of blood donation.

We administered a questionnaire including the following items to female college students majoring physical education (264 freshmen and 336 juniors). 1) Frequency of blood donation (BLD) and reason/motive for it 2) Intention of blood donation in future (INT) 3) General tendency to help others (HPT) 4) Adorno's F-scale (FSC) 5) Experience of being transfused (BLT) 6) Word association to "Blood donation" (WA) 7) Knowledge about blood donation (KNW).

The results were: 1) 18% of the freshmen and 36% of the juniors had donated blood at least once (the latter percentage was significantly larger); 87% each of the both groups replied they had intention to donate blood in future. 2) BLD and INT were positively correlated. 3) Those high in HPT showed higher BLD and more often INT than those low in HPT. 4) KNW significantly contributed to BLD, but not to INT. 5) Negative affect toward blood donation revealed in WA was negatively related to INT, but not to BLD. 6) Discriminant analysis for the 3 groups according to BLD with 6 predictor variables led the following function.

$$Y \text{ BLD} = 0.5593\text{HPT} + 0.543\text{KNW} + 0.4775\text{INT} + 0.2267\text{FSC} + 0.0687\text{WA} + 0.0366\text{BLT}$$

We conclude that blood donation is an indication of general helping tendency, but is also caused by relevant knowledge and intention.

I 緒 言

約10年位前、米国において発生した殺人事件に
対して、それをだまってい見過した大勢の善良な中

流階級の市民の反応を契機にして、米国では、心
理学者を中心に **Helping behavior** (援助行動) と
いうことに関心がもたれ、この種の研究が行なわ

* 日本女子体育大学

* *Japan Women's College of Physical Education*

れるようになったと言われている。¹⁾²⁾³⁾

わが国においても心理学・社会心理学において研究がはじまり出したところである。

保健医療の分野では、援助を受ける側の行動—例えば、いつどのような形で保健医療機関を訪れるかといった種類の——保健行動の研究は近年盛んになってきているが、援助をする側については、それが最近まで専門職だけにまかされていた——例えば、医療や保健相談を訪れた人々に対して医師をはじめとする保健医療従事者がどのように援助するかといったように——こともあって、研究の必要性はほとんどなかった。しかし、保健医療場面におけるボランティア活動、しろうとによる救助活動、家庭看護の必要な場面が増えたことなどにより、この援助行動の研究が今後必要になると考えられる。

これまでに筆者は高校生・大学生の援助行動傾向についてすでに研究を重ねてきているが、これは、もっぱら質問紙での仮定的な場面に対する言語反応にたよったものであった。⁴⁾⁵⁾援助行動には、さまざまな種類のものがあるが、これを現実直接とらえることは、一般にそうたやすいことではない。そこで、この援助行動の極めてはっきりした形として、ここでは献血行動をとりあげ、個々人の献血行動経験と一般的援助行動傾向との関係を知ろうとした。さらに援助行動の一つである献血行動に関連する要因は何か、その要因相互の関連性についても検討した。

すなわち、この研究の目的は以下の事項である。

- (1)女子体育大生の献血行動と献血の意志の程度
- (2)献血行動および献血意志と援助行動傾向、社会的態度との関連
- (3)献血行動および献血意志の、献血に関連した特殊な要因
- (4)献血行動および献血意志に関連する要因の相互関連性

II 調査方法・調査内容

女子体育大生1年264名、3年336名に対して、昭和52年7月に以下の内容を含む質問紙調査を各々

集団的に行なった。(ここで体育大生を選んで対象とした理由は、体育大生は身体的に健康な者が多く、献血可能な学生が多いこと、また将来保健体育の教師・社会体育の指導者となるべく、高学年になるにつれて、専門的学習をしているため、一般人に比して献血行動が多いと推測されたためである。)

質問内容は以下の項目が含まれる。

- (1)献血経験の有無と動機・理由
- (2)今後の献血の意志
- (3)輸血を受けた経験：本人が受けた経験がある場合2点、家族・知人1点、両方ない場合0点として得点化した。
- (4)献血から連想する用語・事柄：「献血」から連想する用語・事柄を3つ書くように求め、その最初に書かれたものを「赤」「救急車」「注射器」などを中立的とし1点、「いたい」「いやだ」「こわい」「死」といった反応を否定的とし0点、「人のために」「助ける」といった反応を肯定的とし2点を与えて得点化した。
- (5)献血に関する知識：献血の適用、採血量、血液の保存、献血後の身体の回復、血液不足の現状などに関する知識項目を10項目作成し、これについての正解数を合計した。
- (6)一般的援助行動傾向：疋田により作成されたもので、次のような内容を含む15項目よりなる調査表により調査した。

例

イ。落し物に気づくと注意しますか。

ロ。道をたずねられたら親切に教えてあげますか。

ハ。小銭がないので切符代を貸してくれと言われたら貸してあげますか。

ニ。ひと気のない駅のベンチでまっ青になって気分が悪そうな人を見かけたら声をかけますか。

それぞれの項目にそうする——そうしないまでを7段階で評定を求めている。得点が高いほど援助傾向があるように配点してある。⁶⁾

- (7)権威主義的態度：F-scaleと呼ばれ Adorno,

T.W.によって作成された権威主義的態度（浜田哲郎他訳による）を用いて関連をみた。この態度調査は30項目の意見に対し、非常に賛成から非常に反対まで6段階で評定させるものである。⁷⁾

献血に関しては昭和49年保健衛生基礎調査を参考にして作成した。

Ⅲ 結 果

(1)献血経験と献血の意志

1年生と3年生で献血経験をみると、1年生では18%、3年生36%がこれまでに経験しており、2回以上献血した学生は1年生で6%、3年生で15%で献血経験者総数においても、経験の回数からも、3年生で約2倍になる。これを献血行動の回数により（献血行動なし、献血行動1回、献血行動2回以上）分けて1年と3年で分布の差を検定すると（ X^2 -検定）、1%水準で有意な差がみられ、また献血回数の平均の差の検定においても、同じく1%水準で有意であった。

経験のある学生のうち、はじめて献血した動機は「呼びかけに応じて」が多く、1年生で80%、3年生で72%で、あとは「家族・知人が必要としたから」がほぼ同じ12%程度で、特に「動機がなかったが」というのが1年生で6%、3年生で17%と3年生に多い。

経験のない学生の理由は、「きっかけがなくてしてない」者が1年生で多く、経験のない者のう

ち60%、3年生では38%、「しようとしたが、身体的条件が十分でなくてできなかった」者が1年生で15%、3年生で26%であった。この両者は、きっかけがあり、身体的条件さえ整えば献血する意志はあったとみてよからう。これを合わせると1年生で76%、3年生で65%になる。また、献血経験のある者と「身体的条件が整わなくてできなかった」者を合わせると、1年生では30%、3年生では53%で、この学生達は献血しようと行動したことになる。

その他の理由は「やる気がない」「怖い」「健康に悪い」と思っている者で、1年生で約25%、3年生で35%で、そのうち「怖い」と反応した者が1年生で12%、3年生で25%近くいる。

一方、今後の献血の意志は、これまでの経験なしの理由として、献血に否定的であった学生も「ある」と答えた者もいて、「ある」が1年生、3年生とも87%、「ない」と答えているのは13%と、学年の間にまったく差がない。

表2 学年別・献血行動なしの理由

	1 年		3 年	
	N	%	N	%
身体条件悪し	33	15.7	56	26.2
きっかけなし	131	60.4	82	38.3
意志なし	10	4.6	18	5.4
健康に悪い	15	6.9	6	1.8
怖い	27	12.4	52	15.5
計	217	100.0	214	100.0

表1 学年別 献血行動

	1 年		3 年	
	N	%	N	%
献血回数				
0 回	217	82.2	214	63.7
1 回	31	11.7	73	21.7
2回以上	16	6.1	49	14.6
計	264	100.0	336	100.0
平均得点	0.30		0.66	
標準偏差	0.79		1.14	

分布の差の検定 X^2 (df, 2) = 25.46 $P < 0.001$

平均の差の検定 t (df, 598) = 4.63 $P < 0.001$

表3 献血行動と献血意志

	献血意志あり		献血意志なし	
	N	%	N	%
献血回数				
0 回	177	60.8	37	82.2
1 回	66	22.7	7	15.6
2回以上	48	16.5	1	2.2
計	291	100.0	45	100.0
平均得点	0.56		0.20	
標準偏差	0.76		0.46	

X^2 (df, 2) = 9.16 $P < 0.01$

t (df, 334) = 9.36 $P < 0.01$

献血行動と献血意志との関係を3年生のみについて献血行動回数により3群に分けてみると(1年生は献血経験のある者が少ないために除いた),分布の差の検定でも,平均の差の検定でも有意な関係がみられ,献血行動の多い学生の方が有意に献血意志があると言える。

献血意志と献血しなかった理由とを対応させてみると,「きっかけなし」と答えた者は意志ある者に多く,「恐い」とした者は意志のない者に多い。このように献血意志と献血行動あるいはしなかった理由には有意な関係がみられている。経験がありながら,これからの献血に意志がないと答えた者が8名いる。

(2)献血行動・献血意志と一般的援助行動傾向および権威主義的態度

この研究では,援助行動のひとつとして献血行動を取りあげ,その現状と関連する要因を明らかにすることが目的である。そこで献血行動および献血意志と,一見献血に関係のないその他の一般的援助行動傾向との関係を,3年生336名につい

て検討した。

その結果,献血行動によって分けた3つのグループで一般的援助行動傾向の平均得点をみると,献血行動の多いグループほど平均得点が高く,一元配置分散分析により1%水準で有意差がみられる。一方,献血に対する意志の有無によって一般的援助行動傾向の平均得点に差があるかどうかをみると,5%水準ではあるが意志「あり」で有意に平均得点が高くなっている。このように献血行動の多い者の方が一般的援助行動傾向の平均得点が高いことが確認された。すなわち,献血行動,献血意志は献血という特定の場面での行動や意志とは言え,個人内においては,それ以外の一般的な援助行動とかかわっていることが明らかになった。

一般的援助行動とは違う権威主義的態度とどのように献血行動・献血意志が関連しているかを検討したところ,献血行動・献血意志によって権威主義的態度平均得点に有意な差はみられない。

これは言いかえると,献血行動・献血意志は一般的な援助行動傾向とは関係が深い,権威主義的態度の尺度で測られるような態度とは異なっていることを示している。

(3)献血行動・献血意志に関連するその他の要因

献血行動・献血意志が一般的援助行動と深い関連があることが示唆されたが,一方献血そのもの

表4 献血しない理由と献血意志

	身体条件悪し	きっかけなし	意志なし	健康に悪い	恐い	計
献 血 あ り	7 (18.9)	7 (18.9)	4 (10.8)	2 (5.4)	17 (45.9)	37 (100.0)
意 志 な し	49 (27.7)	75 (42.4)	14 (7.9)	4 (2.3)	35 (19.8)	177 (100.0)

$\chi^2(df, 4) = 15.30 \quad P < 0.05$

表5 献血行動・意志と一般的援助行動傾向および献血に関するその他の要因

献血回数	一般的援助行動傾向		権威主義的態度		輸血をうけた経験		献血に対する知識		献血に対するイメージ	
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差
0 回	76.73	10.66	102.71	15.38	0.53	0.55	6.06	1.31	0.96	0.50
1 回	78.90	10.87	104.97	16.39	0.52	0.50	6.51	1.29	1.04	0.56
2 回以上	81.73	7.75	104.62	14.25	0.52	0.50	6.52	1.50	1.02	0.48
計	77.93	10.47	103.46	15.47	0.52	0.53	6.22	1.35	0.99	0.51
	F (2,333) = 5.07 P < 0.01		F (2,281) = 0.55 n. s		F (2,333) = 0.00 n. s		F (2,307) = 4.18 P < 0.05		F (2,333) = 0.75 n. s	
あ り	78.39	10.29	103.47	15.57	0.52	0.53	6.25	1.33	1.01	0.51
な し	74.98	11.22	105.81	14.71	0.56	0.55	6.02	1.47	0.82	0.49
計	77.93	10.47	103.47	15.47	0.52	0.53	6.22	1.35	0.99	0.51
	F (1,334) = 4.16 P < 0.05		F (1,282) = 0.94 n. s		F = (1,334) 0.19 n. s		F (1,308) = 1.06 n. s		F (1,334) = 5.38 P < 0.05	

※F値は3群もしくは2群の平均の差の検定

についての認識や知識などと行動が関連することが考えられる．そこで献血そのものと関連する要因として以下の3項目を用いて、前述したと同じく一元配置分散分析を行なって関連をみた．

その結果、輸血を受けた経験については、献血行動の多少および献血意志の有無により平均得点に有意な差はない．献血に対する知識では、献血行動の多少により献血に対する知識の平均得点の間に有意な差がみられるが、献血意志の有無によっては有意な差はみられない．一方、献血に対するイメージは、知識とは逆で、献血行動の多少により献血に対するイメージ得点の平均の間には有意な差はないが、意志の有無によっては有意な差がみられる．

すなわち、ここで献血行動や意志に関連しているだろう献血に固有な要因として取りあげた輸血経験、献血に対する知識、献血に対するイメージのうち、輸血経験は献血行動・献血意志ともに関連なく、献血に対する知識が献血行動と、献血に対するイメージが献血意志とのみ関連していることがわかった．

(4)献血行動・献血意志と関連する要因の判別分析

さらに前述した献血行動と関係する要因相互の関連をみるために判別分析を行なった．

献血行動はこれまでの一元配置分散分析で用いたのと同様に、献血行動 (BLD) 0回、1回、2回以上、の3グループに分け、要因 (予測変数) としては以下の6変数を用いた．

- (1)一般的援助行動傾向 (HPT)、(2)権威主義的態度 (FSC)、(3)献血意志 (INT)、(4)輸血を受けた経験 (BLT)、(5)献血に関連する知識 (KNW)、(6)献血に対するイメージ (WA)

これらの6変数を投入して直接的に解を求めた．その結果、ひとつの判別函数についてF値が5%水準で有意であった．その得られた判別函数は以下のものであった．(ただし各変数ともに標準化されているとして)

$$Y \text{ BLD} = 0.5593 \text{ HPT} + 0.5434 \text{ KNW} + 0.4775 \text{ INT} + 0.2267 \text{ FSC} + 0.0687 \text{ WA} +$$

0.0366 BLT

標準化された判別係数の大きさにより献血行動と関連が強いとみなされる変数は、一般的援助行動傾向、続いて献血に対する知識、そして献血意志である．すなわち、献血行動をもとに3グループに分けた場合、これを見分けるのに効果的な変数は一般的援助行動傾向、献血に関連する知識、献血意志であり、輸血経験や献血へのイメージは効いていないことがわかる．

この判別函数を用いて、個々のケースを分類し(3群に等しい割合で人数が分布していると仮定して)、これと現実の群のどちらかに分類されているかとのずれをみると的中率45.42%である．(また予測の際に、現実の群の大きさを考慮した場合には、2名を除きすべてが献血経験なしのグループに分類され意味のある結果は得られなかった．)

次に献血意志の有無によって2グループに分け、今度は献血意志と献血行動を入れかえた6変数で同じように判別分析を行なった．その結果、得られた判別関数は次のようであった．(F値は5%水準で有意)

$$Y \text{ INT} = 0.5721 \text{ BLD} + 0.3934 \text{ HPT} + 0.3877 \text{ WA} + 0.3340 \text{ KNW} - 0.1723 \text{ BLT} - 0.2813 \text{ FSC}$$

この標準化された判別係数の大きさにより献血意志と関連の強いとみなされる変数は献血行動であり、次いで一般的援助行動傾向、献血に対するイメージ、献血に対する知識が同程度に関連している．

この判別関数を用いた、個々のケースの現実と

表6 献血回数につき判別函数から予測されたグループ分けのあてはまり

実際のグループ分け	N	予測されたグループ分け		
		1	2	3
グループ 1	184	93 (50.5%)	33 (17.9%)	58 (31.5%)
グループ 2	65	22 (33.8%)	13 (20.0%)	30 (46.2%)
グループ 3	35	6 (17.1%)	6 (17.1%)	23 (65.7%)

的中率 = 45.42%

表7 献血意志につき判別函数から予測されたグループ分けのあてはまり

実際のグループ分け	N	予想されたグループ分け	
		1	2
グループ 1	36	25 (69.4)	11 (30.6)
グループ 2	248	97 (39.1)	155 (60.9)

的中率=61.97%

のずれをみると、的中率は61.97%となっている。(予測の際に現実の群の大きさを考慮した場合には、すべてが献血意志ありのグループに分類され、意味のある結果は得られなかった。)

IV 考 察

献血行動という保健医療に深い関連をもつ援助行動をとりあげ、より広い援助行動傾向との関連、および献血と関係したその他の特殊要因(ここでは輸血を受けた経験、献血に関する知識、ならびに献血に対するイメージ)との関連を女子体育大生を対象にして調べた。

厚生省による昭和49年の保健衛生基礎調査の輸血に対する国民の意識調査での同年令を含む(20~29才)女子の献血経験者と比較すると⁸⁾(大学1年生は20才未満であるから別として)大学3年生では、全国大都市での「経験あり」21.3%と比較して、36.3%と高い。献血の動機をみても全国調査での「呼びかけに応じて」が61.8%、「家族や知人が必要としたから」32.0%、「特にきっかけなし」6.6%と比べると、「家族や知人が必要としたから」というより、呼びかけに応じたり、特にきっかけがなくて献血している学生が多いことがわかる。

また献血をしていない理由として、全国調査では「きっかけがなかった」者が53.9%と最も多いが(1年生ではまだ献血年令になって年月がたっていないためにこの理由が60%を占めているが)3年生では38.3%と少なく、むしろ「断わられた」というのが全国調査の15.0%に比べると26.0%と高くなっている。しかし一方、「恐い」とか「献血の意志なし」というのが全国調査各々5.3%、2.0

%であるのに比して、3年生で15.5%、5.4%と高くなっており、ひどく拒否的な学生もいる。このような対象の両極端さは、献血行動や献血意志に関連する要因をより明らかにしていると考えられる。

献血行動や献血意志が、その個人の献血以外の一般的援助行動傾向と関係するものかどうか、また権威主義的態度と関係するものかをみた。この疋田の作成した一般的援助行動の項目の中には身体的に弱い者に対する援助が4問(例えば、まっ背になって気分が悪そうな人、路上に倒れた人、道ばたで倒れている人、車中疲れてしんどそうに立っている人といった)が含まれているが、これだけでなく金銭上の援助、頼まれ事、その他の理由で相手が困っている時など様々な状況下の質問が含まれている。にもかかわらず、献血行動の多い方がこの一般的援助行動傾向の得点が有意に高い傾向を示し、献血意志の有る方が同じように一般的援助行動傾向得点が有意に高いことが明らかになった。一方、権威主義的態度は、献血行動や献血意志とはまったく関係していない。これは権威主義的態度が政治や社会一般の倫理を項目としているためとも考えられ、今後はこの他の社会的態度、特に対人的な社会的態度との関係を追求していかなければならないであろう。

一方、献血行動・献血意志と直接関係すると一般に考えられる献血そのものに対する認識・態度・知識との関連についてみた結果は、本人及び家族が輸血を受けたかどうかの経験は献血行動、献血意志とまったく関係なく、献血に関する知識が、献血行動と、献血に対するイメージが献血意志と、有意に正に関連していることが明らかになった。

さらにこれらの要因の相互の関連の分析では、献血行動には献血そのものに対する認識や知識よりも一般的援助行動傾向の方が強い関連をもっていること、次いで献血に関する知識であり、献血意志がそれに加えて効いていることが確認された。

それにひきかえ献血意志の方は、これまで献血行動をしたかどうかが最も影響しているが、次いでは、やはり一般的援助行動傾向である。イメージ、知識はほぼ同じ程度の関連をもっているとい

えよう。

献血行動は過去において献血をしたかどうかであり、献血行動をしたことによって、結果として献血に対する知識や意志が変化したということも当然考えられる。従ってこれらの変数を規定因としてではなく献血の結果として考えることもできる。しかし一般的援助行動傾向は献血行動によって容易に変化することは少ないであろう。

これにひきかえ献血意志は、これから献血をするかどうかであり、これが、これまでの献血行動ともっとも関係が強いことは容易に理解される。また2番目に一般的援助行動傾向が関連していることは、前の献血行動ともっともよく関連していたことも合わせて、献血意志、献血行動の規定因としてこの傾向が強い関連をもっていることが推察される。

このように献血行動といった一見特殊な人間の行動のように見られる行動が、実は、献血に限らず広く援助行動一般と強く関連していることに対して、われわれはもっと理解をもつことが必要であろう。

V ま と め

自己の保健行動とともに、他人への援助行動が社会的にきわめて意義ある行動とみなされるようになってきている。この援助行動のはっきりした形として献血行動をとりあげ、以下のことを検討した。1) 女子体育大生の献血行動および献血意志と一般的援助行動傾向との関連、2) この他の献血行動・意志と関連する要因、その要因の関連性。

女子体育大生(1年264名・3年336名)に対して、以下の内容を含む質問紙調査を行なった。1) 献血行動(BLD)の回数と動機・理由、2) 今後の献血の意志(INT)、3) 一般的援助行動傾向(HPT)、4) 権威主義的態度(FSC)、5) 輸血を受けた経験(BLT)、6) 献血から連想する用語・事柄(WA)、7) 献血に関連する知識(KNW)

その結果：1年生18%、3年生36%が献血経験者、3年生に献血行動が有意に多い。今後の献血の意志は、両学年とも87%が「ある」。2) 献血行

動の多い学生の方が有意に献血の意志がある。3) 献血行動の多い学生、献血意志のある学生ほど、一般的援助行動傾向の平均得点が高く有意差がある。4) 献血行動の多少により知識平均得点の間に有意な差がみられるが献血意志の有無によっては有意な差はない。5) 献血行動の多少によりイメージ得点の平均の間には有意な差はないが、意志の有無によっては有意な差がある。6) 献血行動・意志の規定因の判別分析(3グループ6変数を用いた判別分析)により以下の判別函数が導かれた。

$$Y \text{ BLD} = 0.5593 \text{ HPT} + 0.5434 \text{ KNW} + 0.4775 \text{ INT} + 0.2267 \text{ FSC} + 0.0687 \text{ WA} + 0.0366 \text{ BLT}$$

すなわち、献血行動は一般的援助行動傾向のあらわれであるとともに、献血に対する知識・献血意志が働いて生ずると思われる。

この集計は東大計算センター HITAC 800/8800により行なった。

なお、この研究は第43回日本民族衛生学会(金沢)において発表した。

参 考 文 献

- 1) 梅本堯夫：救助の心理について、京都大学学生懇話室紀要、第5輯。P2~6, 1975
- 2) Bible, Latane et al. 竹村研一他訳：冷淡な傍観者、ブレーン出版、1977
- 3) ローレンス・M. プラマー、対馬忠他訳：人間援助の心理学、サイマル出版会、1978
- 4) 波多野梗子他：高校生の他人への援助認識と援助行動、学校保健研究、17(1)23~28, 1975
- 5) 波多野梗子：女子大生の他人への援助行動傾向とそれを規定する要因に関する研究、第38回日本民族衛生学会(福島)
- 6) 疋田優子：大学生の援助行動に関する態度の研究、京都大学教育学部卒業論文、1976
- 7) 浜田哲郎：F-scaleによるパーソナリティの研究、教育・社会心理学研究、4, 1~12, 1963
- 8) 厚生省大臣官房統計情報部編：昭和49年保健衛生基礎調査(輸血・移植)